



至 從  
第 第  
三 一  
說 說

李仙碍建言第五十號

123  
A4452



114  
A4452

第三十五号

東京千八百七十五年十月九日

八尾正文譯

大正十一年四月

謹テ閣下ノ指令ヲ奉シ魯西亞及ヒ顔利曲ノ亞  
細亞ニ於テ日本及ヒ支那トノ交際上其著目ス  
ル所之記事数編今般成功候間則呈高覽候尤モ  
右記事中第七節ハ兼テ閣下ヨリ特別ニ詳細ヲ  
可記旨御下命相成居候杜日耳曼ノ台灣島ニ企望  
アル義ヲ論セシモノニ有之唯相恐ラクハ拙者  
此ノ須要ナル事業ニ從事之際或ハ閣下之御旨  
意ヨリノ無用之遠慮一走候哉ニ難斗若然ラハ

一三五六ノ四節ハ御除捨相成候ニ更ニ他編ニ阻動不致様撰文致置候也謹言

李仙碍

参議大隈重信閣下

3

建言第五拾号

八尾正文譯

魯西亞及ヒ貌利典カ亞細亞ニ於テ日本及ヒ支那ト交際上其著目スル所ヲ論ス

第一説

亞細亞ニ於テ魯英兩國ガ日本ト支那ニ對シ其關係目的ノ未タ暗昧中ニ在ルモノヲ探索推究ヤントスルニ當リ孰ラ惟フニコノ問題ヤ頗ル現今ノ日本ニ關係アルナリ英魯兩國ノ既ニ已ニ亞細亞兩帝國ヲ蔑視シテ輕慢ノ形狀ヲ露ハスモノ又嘗一回ニ止マラス而シテ兩國ノ動作ハ

常ニ神密ニメ意匠ノ深遠究テ測量ス可カラス  
 ト雖トモ外部ハ榮子虚飾以テ相接スルカ故ニ  
 外人ヲシテ疑惑ヲ醸シ憂思ヲ生セシムルモノ  
 甚タ多シ而ノ彼ノ魯英兩國ノ如斯類ニ暴慢ナ  
 ルモノハ蓋シ西洋ニ於テ最モ富强ナルモノハ  
 地位ヲ占有スレハチリ抑モ魯西亞ノ強盛ヲ致  
 所以ヤ千八百年代ニ征服セル西北北東亞細亞  
 ノ全分ヲ合併シ其領内ノ廣大人口ノ盛大ノミ  
 ナラス戦畧ヲ施スハキ便地モ亦随テ多ケレハ  
 ナリ亞細亞領内ノ北下西トハ支那本邦ト屬地

トニ接境スルモノ甚長シ而メ其北東ハ蝦夷口  
 本ト纜ニ海路ヲ隔テ相對峙ス蒸氣ノカヲ藉レ  
 ハ此ノ諸島ニ航スルモ唯數時間ヲ要スルノミ  
 又々眼ヲ轉シテ英國ニ付テ論セン英國ノ可畏  
 ハ特ニ其比類ナキ富ヲ致スト威力測知ス可カ  
 ラサル海軍ノ強大ナルト其人民ノ異常ニ謀畧  
 深ク且銳鋒不可避ノ勇敢ナルトニ因ルナリ彼  
 ノ南亞細亞ニ在ル殖民地ノ支那ニ關係アル有  
 様ハ魯西亞ノ北方ニ於テ支那ニ於ケルト事ヲ  
 同フセリ而メ英國道氏地ノ一ナル香港ハ彼ノ

獨り完大ナル一大帝國ヲ致セ、英領印度ヨリ  
ノ進路ナル一屬島ニメコノ島ヨリ東京マテハ  
纜ニ六日路ニメ達シ得ヘキナリ

英魯兩國ハ如斯逼迫シ来ルノ際支那ト日本ノ  
状態ヲ竊觀スルニ大ニ異ナル所アリ支那ハ其  
領スル處口廣大不測ニメ亦不量ノ富饒ヲ保有  
スルト雖氏種々ノ事由ニ因テ國力太々弱シ故  
ニ西隣ノ為ニ攻撃セララル、モ之ヲ防禦スルヲ  
得サルナリ而メ其偏見ト傳來トニ泥テ舊習ヲ  
脱セス自國ノ部分ヲ顧ヒスノ更ニ又コノ不當

ノ抑壓ヲ免カレ、一ノ策カラサルナリ日本ハ  
反之己ニコノ有様ヲ領認シ得ルト雖氏種々ノ  
緣故ニ因テ其隣國ヨリモ甚々強カラサルナリ  
何トナレハ日本ノ國タル蛇状ノ諸島ニ因テ組  
立ラレタルカ故ニ沿海線路モ亦随テ長曼ニシ  
テシカモ新發明ノ便利ナル兵器ノ用意ナク城  
砦ノ築造ナク碎船器水雷火ヲノ設置ナキ等渾  
テ軍陣ニ必用ノ器械未タ備リタル非サレバナ  
リ况ヤ海岸概シテ近寄難キ處アラサルニ於テ  
ヲヤ素ヨリ日本ノ兵谷中或ハ日暮モ著明ナル機

飛艇式

六

機

械アリテ其使用ニ至テモ甚タ諒熟ヲ經タルア  
 ルハ余モ亦領知スル處口ト雖モ邦内汽車ノ通  
 運未タ闢ケサルハ故ニ軍隊ヲメ轉移伸縮手足  
 ノ如ク自由ナラシムル能ハス果シテ然ラハ若  
 シ敵ノ海軍カ一時ニ數所遠隔ノ海岸ヲ侵撃ス  
 ルカ如キアルモ適宜軍隊ヲ配布セント欲スト  
 雖モ豈得可ケンヤ如之日本ノ人民ハ大半米魚  
 ノ以テ常食トナシ豚牛ノ肉ヲ喰ハス仮令豚牛  
 ノ肉ヲ喰ハントスルモ其設ケアラサルナリ故  
 強大ナル海軍隊ヲ帥ヒテ攻撃スル貌貅ノ陸軍

邁戦利アラスメ空シテ舟船スル事アルモ亦海  
 軍ヲ以テ日本國內ヲ饑饉ニ墮入ラシムルノ術  
 アリ是時ニ當テヤ環海ニアリテ機ヲ見  
 テ上陸シ田地ヲアラシ漁獵ヲ妨害スル  
 故ニ仮令日本ガ戦勝ツモ終ニ饑餓ノ為メ敗ヲ  
 取ルニ至ルヘシ  
 今ニメ尚コノ軟弱ノ形勢アリ矧ニヤ加之ルニ  
 魯英兩雄何レカ防禦ナキ交那ヲ併吞シテ其地  
 中ニ隱埋セル小測ノ富ヲ利シ日本ノ南部ニ渡  
 航スル蒸氣海路纜ニ二十六時爲ニメ達スルヲ

ヲ得ルニ至ラハ葛地一層ノ憂慮増生スヘキナ  
 リ  
 右ハ想像中ノ陰部ナリ然レ其陽部ニ至テハ  
 或ハ魯英カ亞細亞中ニ縱横スルヲ懼忌スル人  
 民アルモ兩國ハ暫ク所分ヲ他方ニ施スナリ則  
 中ハ西方亞細亞ト歐羅巴トニ於テシ乙ハ印度  
 ニ於テスルナリ故ニ譬ニ兩國ノ方策ハ既ニ日  
 ヲ征服シ得ルノ豫算アルモ決シテ之ヲ現今  
 ニ實行スル能ハサルナリ而メ兩國ノ始計ノ爰  
 ニ現存スルヲニ付テ 前ニ余カ建白第四十二

7

号ニ於テ明瞭陳述セシ其時以來余カ竟見ハ尚  
 依然トシテ変セサルナリ抑モ亦英國ノ日本ニ  
 全望アル目的ナルモノハ千七百年代ニ同國ニ  
 於テ一般決定セルカ如ク國カノ已レヨリ軟弱  
 ナル邦國トノ交際仕方ニ於テ日本ヲ所セン  
 ト欲スルノ旨意ナルハ余カ確信スル處ナリ何  
 ナレハ英國カ自來コノ目的ヲ廢棄セシノ踪跡  
 ハ未タ史上ニ於テ見サル處ナレバナリ矧ヤ現  
 然巴レト種属ノ同フスル殖民ヲ御スルサハ其  
 抑雇ニ苦ミ權理ヲ主張スル時ニ至ラサレハ決

ラ其方向ヲ変セザルニ於テオハ而メ英國ノ日  
 本ニ要スル処ハ現ニカナダニイギリスノランド  
 オーストラリアリヤ印度ギリイスイジプト等ニ要  
 スル處ト毫モ異ナルアルヲナシ而メ之ヲ要ス  
 ルモノハ他ナシ英國ノ一部ノ損害ヲ避ケン為  
 ノノシニアラス其外敗ヲ豫防センカ為メ日本  
 ヲシテ強テ生粗物ヲ輸出セシメ之ヲ彼レニ輸  
 入シ彼レノ製造所ヲ盛大ニシ而メ製造品ト為  
 シ之ニ報酬セントノ意タルハ必定ナリ然ル時  
 ハ生粗物ト製造物ト價差違ハ日本ニ於テハ

8

莫大ノ損トナリ英國ノ為メニハ莫大ノ得トナ  
 ルナリ異説ノ經濟者流アリテ或ハ曰フ譬ヒ如  
 昔ニ日本ノ為メニ一毫ノ害トナルノ理ナシト  
 何トナレハ一國ナルモノ一人ナルモ其要用トス  
 ン物品ヲ買ハントハルニ其最モ廉價ニテ購得  
 ハキ處ヨリ買フヲ以テ便利トナスト則チ英國  
 ノ製造物ハ他各國ノ製造物ヨリモ低價ナルカ  
 故ニ日本カ其需要品ヲ英國ニ購フハ猶天然ノ  
 市場ニ仰クカ知レト然リ而メ余ハ如斯キ損害  
 ヲ未發ニ防禦シ能フニキカ為メ今國カヲ強



ラシムルニハ総テ國內ニ必要ノ物品ハ可成大  
 ケ自國ニ産セシメサルヲ得サル處ノ本ノ如  
 キ一ノ國土ニ比較シテ彼ノ異説ヲ論破スルハ  
 難キニアラサレト爰ニ之ヲ贅セス凡ソ宇内ノ  
 各國則チ魯西亞、孛滿生、澳地利、伊多理、白耳義佛  
 蘭西、合衆國ノ如キ自他ハ姑ク置キ皆チ英國ノ  
 專賣ヲ厭フテ二十五ヶ年来ハ保護法ヲ行フタ  
 然レハ已ニ是等ノ數國カ都合能ク之ヲ仕遂  
 ケタル實地經驗ノ適例アリ特ニ此ノ權謀ノ目  
 的ハ日本古來ノ傳來ナルヲ及顧シ察スレハ何

4

故日本ハ彼ノ數國ノ先轡ヲ踐行為サ、ル哉余  
 カ疑團益疑固シテ解シ能ハサルナリ今若シ日  
 ノ為メニ最モ自負シ能フハ何物ナラシト問  
 ハハ余ハ輒チ之ニ答テ云ハン二千年已降一物  
 ヲ他ニ仰カス自國ニ産スル處ニテ足ラシメタ  
 リト現今日本ハ外國ト各約ノ故アルヲ以テ保  
 護稅則ヲ設ケント欲スルモ容易ニ得ヘカラサ  
 ルノ困難アルハ余モ熟知スル處ナリ然ト雖モ  
 余カ建言第四ノ貳號ニ陳述セシカ如クコノ困  
 難モ強チ侵シ難キニ非ズ若シ任意ニ之ヲ試

十八尚且コノ困難ヲ免カレ随テ國カノ強盛モ亦期ス可キナリ而メ之ヲ行フノ日ニ始テ英國怖ル、ニ足ラス却テ英國ハ曾テ彼レノ合衆國ニ於ケルカ如ク細心シテ日本國ニ企望ノ念ヲ断ツヘキハ言ヲ俟タスシテ明カナリ是ノ時ニ當テ若シ英國カ日本ニ迫ラントスルモ征台一條ノ時ニ長崎ニ於テ「ビ」ハム氏カ大氏ヲ威嚇シ北京ニ於テ「ウエー」ド氏カ大久保氏ヲ脅迫セシカ如キ議論ノ紛紜ニ過キサルノミ如斯非常ノ場合ニ於テ、難害ヲ避ケンニハ恒ニ

不動ニ謹慎ニメ且熟練ナル交際ニ因ルナリ此際ニ中リ日本ノ勝利ヲ占メシニハ曾決意固執忍耐ノ勸キニ有ルナリ而メ日本カ狄利典ノ抑壓ヲ免カル、ヲ得ハ余カ曾テ建言第四十二號ニ陳述セルカ如ク、魯西亜ハ必定日本ニ害心ヲ狭マサルノミニ非ラス日本カ英國ノ抑壓ヲ免カレント勉強スルニ於テハ現時ニ魯西亜ハ直接ノ補助ヲ為カ、ルモ亦日本ニ對シ厚意ヲ表セシハ余カ確信スル要ナリ

第二説

ル大帝及ヒ其權謀ノ事ヲ論ス

余カ想豫ニ於テ魯西亜カ亜細亜ニ企望アル真  
、目的ノ存在セル所以ニ付テ曾テ余カ建言第  
四十二号中ニ説明スリ然ト雖ヒ其必要ナル實  
証ヲ掲テ示サ、リシカ故ニ今爰ニ後章ヲ編シ  
テ以テ前ノ四十二号ノ缺乏ヲ補修セント欲ス  
ルナリ

今ヲ距ル遼遠ナル千五百年ノ時代ニ古西亜ハ  
始テ其境界ヲ亜細亜北方ニ廣メ、ン、テ

リ蓋シ魯西亜カ當時之ヲ企テタル所以ヲ推究  
 スルニ他ノ事情ヲ慮ハカリシヨリハ靴及ヒ  
 モンゴル人ノ攻襲蝨食ヲ豫防セシメテ主旨ト  
 ナセリ否ラサレハ千三百年ノ時代韃靼人カ  
 トトル帝ノ所領ナスヘキ境界ヲ侵シ加之歐羅  
 巴大半ヲ奪掠セシメアルカ故ニ恐クハ之ニ離  
 ラ報ユルノ意ニ出テタルニ過キアルナラン  
 然ト雖モ今日魯西亜ノ確實ナル目的中ニ在ル  
 モノ、根原ハ断然「トトル帝ノ意想ニ發萌セ  
 シ」ト余ハ信據スルナリ然リ而シテ「トトル

12

帝ハ北方及ヒ西方並細亞ノ人民カ曾テ大勝利  
 ヲ仕遂ケル剛猛勇敢ナルニ感心シテ若シ一  
 度ヒ是等ノ數國ヲ併呑シ其人民ヲシテ帝ノ臣  
 民タラシメ之ヲ軍隊ニ編成シテ練熟セシメナ  
 ハ乃チ此ノ救援ニ藉リテ帝ノ子孫ニ至リテ必  
 ス全世界ヲ服從セシムルノ時アラント自信シ  
 タリ故ニコレカ謀畧ヲ遺シ子孫ヲシテ其意ヲ  
 果サシメント欲スルヤ「トトル帝ハ在世中肺  
 肝ヲ碎キ腦髓ヲ勞シ只神心ヲコト一句ニ纏團  
 セテ則其謀畧ニ付テ帝ノ憶算セル處ノモノハ

彼ノ大望ノ遺言中ニ昭然タリ帝ノ遺書ヲ制ス  
 ルニ方テ思ハク魯西亜國民ハ天賦齒爾タル  
 性質ニノ執迷深シ故ニ其感得ヲ強フセンニハ  
 神ニ托スルニ如カスト則チ聖ニメ分離スル能  
 ハサル三位一體ノ神(ホリイェント、イニチウイジ  
 ブル、ツリニケ)ノ名ヲ藉テ虚飾以テ其勇敢ヲ  
 表ハセリ而メ余カ肯テ他所ニモ示セシカ如  
 ク斯ル思想カ一度國民ノ腦髓中ニ蒸深<sup>深</sup>糊着ス  
 ル時ハ夜令其念或ハ断ツテ決テ全ク廢  
 盡スレテアラサルベシト帝ハ想像セレナレハ

ナリ而メ自来魯西亜ハ「ペー」トル帝ノ意ヲ継キ  
 歐洲ノ大半ヲ併吞セント孜孜計策ヲ回ラセリ  
 而メ其併吞セント謀ル處ノ歐洲大半トハ凡ソ  
 國老レハ自カラ軟弱トナリ開化ノ度極マレハ  
 又自カラ奢侈ノ弊害救フヘカラサルニ至ルハ  
 各國止ムヲ得サルノ通弊ニメ昔シ彼ノ羅馬帝  
 國ノ踪跡アルカ如ク北方蠻夷ノ混淆ニ因テ世  
 ノ氣力挽回セシヲ要スルノ嚮導ヲ企望セシ  
 ナラシ是ヲ補助セシカ為メニ一ノ遺訓書ヲ作  
 リ其目的ノ歸着ヲ述ヘ其方畧ノ機密ヲ記シ子

孫ノ必スシモ之ニ從事セシトヲ冀望セリ蓋シ  
 可レトル帝ノ意見ニ因レハポーランド國ノ魯  
 西亜人民カ第一ニ著手為スヘキ國ナリキ而メ  
 其謀畧タルヤ彼レノ國內ニ反間術ヲ施シ絶ヘ  
 ス擾乱ヲ生シ同士相闡ヒ自ラ離隔スル様ニ仕  
 組ミ其時ニ方リテ若シ魯國人民カ之ヲ緊要ナ  
 リト見做セシテハ機ニ臨テハ同國ノ權望ア  
 ル人ニ賄賂ヲ贈リ評議衆ヲシテ互ニ盡惑セシ  
 メシトヲ要セリ而メ是時ヲ以テ魯西亜ノ兵隊  
 ヲ將テ該王國ヲ占有スルノ第一機會タラシメ

陰ニ國政ヲ保護スルニ託シテ竟ニ永世魯國ノ  
 管轄ナリト陽ニ公言シ得ルニ白ヲ待タント欲  
 セリスウエーテン、ペルシヤ、ドルキー國等ノ如キニ  
 施スノ計畧モ亦同手段ノ見込ナリシナリ而メ  
 后千最モ深遠ナル秘密ヲ以テ始メニ佛蘭西  
 次ニ日耳曼ニ各別ニ使ヲ遣ハシ他ノ歐羅巴諸  
 國ヲ征服センカ為メニ救援アラシトテ謀リ若  
 シ該ノ兩國カ魯西亜ノ乞フ處ヲ省セシハ魯  
 帝「<sup>大帝</sup>」トルハ乃千兩國ノ間ニ爭鬪ノ端ヲ醸生  
 セシムルノ策ヲ四ラシ兩國互ニ自ラ垣威ニ就

カシトヲ謀  
 シ置キ而ル后キ魯帝<sup>大帝</sup>トル<sup>大帝</sup>ハ<sup>大帝</sup>控ヲ次テ曰ク  
 コノ機會ニ注目シテ謬マル<sup>大帝</sup>カレ魯西亜ハ魚  
 テ用意ニ集合シタル一團ノ軍隊ヲ放テ先ツ日  
 身曼ヲ襲ハシメ又々巨大ナル兩支ノ海軍ヲシ  
 テ同時ニ発セシムヘシ其一隊ハアゾフ海ヨリ  
 他ノ一隊ハアルキヤシゼル港<sup>ス</sup>リス但ブレッ  
 キシー<sup>ス</sup>（黒海）及ヒバルキク海ヨリ軍裝シタル船  
 隊ヲシテ<sup>ス</sup>亜細亞地方ノ漂民ヲ護送セシムヘシ  
 而<sup>ス</sup>地中海及ヒ大洋ニ沿フテ進ミ一隊ハ佛蘭

15

西ヲ襲ヒ一隊ハ日耳曼ヲ襲フヘシ該ノ兩國征  
 服セシムルヲ得ハ全歐羅巴州又々敢テ筋骨ヲ  
 勞スルニ足ラス却テ争テ軍門ニ降伏シ来リテ  
 我カ隸屬タランヲ冀フモノアル<sup>ス</sup>ミ則コノ方  
 策ヲ以テ全歐羅巴ヲ一統スル得テ期ス可シ全  
 歐羅巴ヲ一統センニハ心スコノ方策ヲ用ヒサ  
 ル可カラサルナリト  
 エノ目的ヲ遂ケシカ為メニ殆ト貳百年以來「ペ  
 ートル<sup>大帝</sup>」帝ノ精智カ後裔ニ降臨シタル可ク思ハ  
 レ其ノ指示<sup>ル</sup>侵掠ノ規則ヲ踐ミタル實蹟ノ

証據ヲ立テ  
 一ヲ日ヲ日ニ次テ連綿怠タラサ  
 リレナリ然リ而メポーランド國ハ既ニ吞噬セ  
 ラレタリ而メトルキーペルシヤ兩國ノ之ニ次  
 カスメ尚今日ニ安存スルモノハ蓋シ魯西亞ノ  
 交際ノ熟練ハ其ノ遺言ノ術計ヲ施スニ充分十  
 ラサリシ乎又タハ亞細亞州ノ漂民ノ助力カ見  
 込ニ通りニ役用セラレザリシカニ原ルヲラン  
 否ラガレハ魯西亞ハコノ目的ヲ遂クニハ英  
 國ノ衰~~衰~~セルヲ待ツモ未タ晚~~ト~~トセスシテ暫  
 シク念ヲ断キシモノナラン尙トナレハ英國十

16

モハ曾テ「ペートル<sup>ル</sup>帝ノ在世中思想ノ外ノ  
 一ノ強國トナリタレハナリ故テ自來魯西亞ハ英  
 國ノ雄カラ落サシメニ「<sup>ト</sup>」ヲ謀ルヨシテ緊要ノ  
 目的ト見做シタルナリ



第三説

千五百八十七年ヨリ千八百七十五年マテ

魯西亞カ亜細亞地方ニ於テ併石セシ國々ノ事ヲ論ス

北及ヒ北東方亜細亞ノ一

魯西亞カ亜細亞ニ藩圖ヲ擴張セシ一ニ付テハ最モ驚愕スヘキ智慧ヲ施行シタリ抑モ魯西亞ハ之ニ着手スルニ當テ中心亜細亞西部ノ廣原及ヒシヤリヤ滿洲ニ攻入センニ敢テ防礙ヲ為スモノ無キヲ信シ且魯西亞本邦ト亜細亞東方ノ

17

極界トニ鑄造線ヲ敷テ連續セシメハ旨意ハ將  
 ニ印度地方ニ事アラントスルノ時ニ中テ石ノ  
 三所ハ進退ノ本地ト為リ或ハ支那ヲシテ已レ  
 カ属下タラシムルノ便地ナラント認タルヤコ  
 ノ三國（中心西細西西部ノ廣原シバリヤ滿州）ヲ征服スルニ就テハ焦心  
 ラ以テ汲々盡カシタリシガ既ニ今日彼レノ版  
 圖中ニ在ルモノヲ看ヨ本國ノ北東境ヨリ起リ  
 テ太平洋ニ徹シ北緯三十八度ヨリ始マリ南東  
 四十三度ニ及ヘリ蓋シ千五百八十七年ニトホ  
 以スル（都邑ノ名）ヲ置キ其後幾クモナラスシテトム

大クタクツオクボツ地名ヲモ亦相續テ置ケリ千

六百三十六年ニ於テ黑龍江モ富饒ノ地方ヲ  
 発見セリ而メ魯西亞ノ外營ハ已ニ廣原ト砂漠  
 間隙ノ地ヲ越ヘテ支那領滿州マテ進ミタ  
 リ曾テ明朝ノ時代支那乱レテ竟ニ韃靼ノ天下  
 ニ一掃スルノ際其紛擾中ニ方テ魯西亞ノ殖民  
 ハ機ニ乘シ進ンテ黑龍江畔ノ諸地方ヲ掠奪シ  
 タリ是ヨリ兩三年ハ交戦續テ止マス其後（千六  
 百四十九年）主將カバルフハ勝ニ乘シテ進入シ  
 千六百五十年ニ共テ魯西亞ノ國旗ヲ黑龍江下

ニ樹テタリヤ明年始メテ魯西亞支那ノ間ニ大  
 戦争ノ端ヲ開キタリシカ乙戦敗レテ兵ヲ退ケ  
 甲カ新ニ掠取シタル地ハ不問ニ置キシナリ魯  
 西亞支那兩國ノ交際ハ此時ヨリ始マル而メ支  
 那ハ素ヨリ既ニ失フタル地ニ就テハ復スルノ  
 念ナシト雖モ其餘ヲ與フルヲ欲セサルナリ然  
 レト雖モ忽チ黒龍江畔ノ地方ヲ盡ク魯西亞ニ  
 讓與セスンハ和親將ニ破レントスルノ勢ニ至  
 リタルモ支那ハ素ヨリ之ヲ欲セサルヨリシテ  
 再々兩國ノ間兵ヲ交ニルニ至リ今度ハ支那ガ

14

攻撃者トナリタリ千六百五十二年支那兵カ  
 チヤンスコイゴロツトノ地ニ在ル魯西亞ノ堡砦  
 ヲ攻撃シタルモ城兵ノ為ニ逆撃セラレタリ是  
 ヲリ千六百八十四年五年ノ間兩國ノ間ニ兵ヲ  
 交ルモノ千百度互ニ勝敗アリタリ其後千六百  
 八十九年六月ニ即位シタル支那帝ガシハ魯  
 西亞ノ依頼ニ任セカトリツキ宗傳教師「ゲレヒル  
 ロン」ヘ「レン」ニレノ西人ヲ以テ全權公使トナシ  
 兩國間ノ葛藤ヲ治メシム而メ和親ノ條約是ニ  
 於テ整フタリ千六百九十二年ニ於テ「ポートル

大帝二十歳之時、イヌデラントツイデス。支那帝カンヒニ使節ヲラシメタリ。支那ニ於テハ之ヲ待遇スル實ニ懇親ヲ含ミ莊嚴ヲ表シタリ。然リト雖、彼ノ使節ヲ待遇セスニ懇親ノ厚キモ尚、兩國間和平ノ交誼ヲ永日ニ維持セン。ヲ保証スルニ充分ナラサリシト想ハル、ナリ。行トナレハ魯西亞ハ忽チ千六百八十九年ノ定約ヲ破リ、黒龍口ニ沿フテ新ニ殖民地ヲ開墾セシナレハナリ。而シテ世人知ルカ如ク、毛皮ハ支那人ノ衣服用ニ欠可カラサルノ要品ナレハ、コソ毛皮ノ質

20

易ヲ維持セシメシカ、為ニ支那ハ必スシエコ。攻襲ヲ寛容スヘシト企望セシヤ、魯西亞ハ大ニ誤テリ。韃靼人ハ大ニ獵事ニ熟練シタレハ、自國ニ必要文ケノ毛皮ヲ供給シ得ルハ、難カラサルナリ。故ニ支那ハ魯西亞ノ破約ヲ責ムルニ森々ナリト雖、魯西亞ハ陽ニ柔和ヲ以テ答ヘ、陰ニ蠶食ノ望ヲ止メザルナリ。是ニ於テ支那帝ハ大ニ怒リ、兵ヲ發レテアルハ、ジン城ヲ襲撃セシム之ヲ圍ム。一三年遂ニ之ヲ攻下シ、其城中ニ在ル者ハ盡ク北京ニ送遣セラレタリ。故ニ當時侵者

(魯人ヲ云)ノ占有スルモノハ帝江頭ノ一部分已  
 而ナリキ此際ペートル大帝ハ西方ニ事多クシ  
 テコノ遠隔ナル殖民地ニ意ヲ用ユルニ暇アラ  
 ス而ノ千七百十九年マデハ支那事件ニ付テハ  
 敢テ願ミサリシナリ加之敗北ノ不利益中ニ商  
 議ノ端ヲ開クハ魯西亞ノ為ニ差聞ヘル處アリ  
 レハナリ然ト雖トモ其後二年魯西亞ハ曾テ  
 夫ヲタル領地ヲ復スルヲ得テ今ハ支那ト均  
 平ノ權衡ヲ以テ事ヲ商議シ得ハキヲ想フヤ輒  
 チ魯西亞ハ再ヒ商議ヲ開カント企望シタリ而

21

メ支那ニ於テモ許諾シタルカ故ニ同年「レオフ  
 ロス」ロウ#クイスマイロフ」ナル者ヲ以テ「ペー  
 トル」帝ノ特命全權使節トシテ北京ニ發遣シタ  
 リ「ココ」ノ同列中「テランゼ」ナル者アリ書記官ノ職  
 ナリシカコノ時北京ニ止マリテ「ミニストル」レ  
 シデント」在留公使トナリタリ而メ使節ノ目的  
 ハ完然本意ヲ遂ケ支那ト毛皮貿易ノ為メニ結  
 隊旅行者ノ便利自由トナルコト渾テ「カンヒ」帝  
 ノ認許ヲ得ルニ及ヘリ然レ氏彼ノ帝威ヲシテ  
 廣ク輝カサシメ能ハサル下輩官吏ノ奸謀ニ原

テコノ同盟ノ約定ヲ實地施行セシムルニ付テ  
 大妨碍ヲ生シタリ此際ニ當テ諸ノ韃靼人等ハ  
 支那政府ノ壓行ヲ惡之ヲ魯西亞官吏ニ歎訴  
 テ彼レノ保護ヲ乞タリ支那政府ハ其人民ヲ  
 復セシメントシテ魯西亞ニ迫リテ「大テラ<sup>魯</sup>ンセ  
西使公ガセリ<sup>防</sup>ンチンヌキ都邑ト往復ノ通信ヲ防  
 ルニ至リ彼是不得止ノ事情アリテ同公使ハ  
 魯西亞ニ引退キタリ是ニ於テ事殆ノ絶交ニ至  
 ラントシテ「大バートル<sup>大</sup>帝モ亦斷然兵ヲ送ラント  
 決意シタリニ適々「大カンヒ<sup>大</sup>帝ノ崩スルニ達フ

實ニ千七百二十三年ナリ因之魯西亞政府ハ「大  
 ンチン<sup>大</sup>」支那帝ナラシムカ此ノ事件ニ付テ如何ナ  
 一處置ヲ為スベキヤ竊ニ窺ヒ居テ「大ト<sup>大</sup>トル<sup>大</sup>帝  
 其間暫ク意ヲ他ニ置テ也ヲ其儘ニ差置キタ  
 リ蓋シコノ事件ニ於テハ不條理支那ニ在リ何  
 シトナレハ兩國間ノ和親及ヒ貿易ノ便利ニ就  
 テ既ニ商量協議整フタル上ニテ之ヲ施行スル  
 ニ於テ種々ノ故障ヲ鳴ラシタレハナリ  
 千七百二十八年六月十四日ニ於テ魯西亞特命  
 全權使節ウテ「大デ<sup>大</sup>ス<sup>大</sup>ラ<sup>大</sup>ウ<sup>大</sup>チ<sup>大</sup>候ト支那國トノ間

三和親ノ条終完ノ整ヲテ從來ノ葛藤ヲ解キ再  
 ヒ魯西亞ノ公使館ヲ北京ニ安存スルト成リ  
 タリ而シテ支那於テ或ハ之ニ付テ不満足ナリ  
 シカハ知ラサレト是ニ因テ一時和睦トナリ魯  
 西亞ヲシテ東部ニ向ツテ其餘ノ境界ヲ侵取ス  
 ルノ好機ヲ與ヘガラシメタリ然リト雖ト是ヲ  
 百三十年ノ後チ魯西亞ハ再ヒ支那帝國ノ乱  
 レテ反賊擾々ニ蜂起セシ際會ニ乘テ自國ノ利  
 益ヲ進捗スルノ時ヲ得テ其目途ヲ達セリ千八  
 百五十八年ニ於テ魯西亞政府ハ英佛ノ公使口

23

内閣ヲ壓迫セルノ好機會ニ乘シテ其上ノ境界  
 ノ侵取シ廣メント策リタリ而シテ魯西亞ハ其謀  
 界ヲ竟ニ恒久ニ隱伏シ置クヲ能ハサルト思フ  
 タルヤ黑龍江ノ殖民地ヲ救援ノ為メ大軍ヲ發  
 遣シ全所ニ送りプ<sup>1</sup>チヤチン<sup>2</sup>候ハ自ラ英佛ト  
 相通シ之レヲ助ケ同時ニ支那ノ為ニ仲人  
 トナリテ勸ラシタリ是ニ於テ支那ハコノ事件  
 カ終ニ魯英佛ノ三國ノ聯合ニ跨ケタレハ如何  
 アル不幸ヲ来スヘキヤト大ニ畏レテ盡ク三國

ノ欲スレ所ヲ許シテセリ故ニ英佛兩國ハ直ニ条  
 約書ニ調印セシタドモ黑龍江ニ發遣セラレタ  
 ル魯國援軍ノ主將タルシバリヤ地ノ總主宰職  
 ムラウキエフ候ハ其地ニ於テ支那全權ト約ヲ結  
 テ黑龍江ノ左岸ウシュリ及ヒ其下流ノ兩岸  
 ヲ盡ク魯西亜ノ所領タラシメタリ而ル后チ  
 一チヤチン候ハ兩國間ノ和親及貿易條約ニ調  
 印セリ  
 是ノ後チ一年ニメ支那ハ再ヒ英佛ト葛藤ヲ生  
 セリ是カ為メ魯西亜ニ於テ再ヒ新地ヲ得ント

24

フルル機會得タリコノ事ニ付テハ魯西亜製ノ  
 大砲數門其日ニ至リ北京ニ現存セルヲ見出し  
 タルノ外更ニ證據ヲ掲ケル能ハスト雖モ英佛  
 三對シ魯西亜政府ハ支那ニ左祖シ應援ヲ為ス  
 ラ名トシ其報酬トシテ別ニ新地ヲ需メタルハ  
 余カ信シテ疑ハサル處ナリ譬ヒ又タ此事ナキ  
 ニモセヨ其實跡ノ今日ニ殘ルモノハ則チ英佛  
 聯合ノ軍威ニ壓迫セラレノ際支那政府ハ一  
 筆ノ下ニウシユリ河ト黑龍江口ヨリ海岸朝鮮  
 界ニ至リマテノ間マンチユリヤノ全海岸ヲ魯



西亞ニ護典シタルナリ是ニ因テ魯西亞商人等  
 ハ商法上昔日ノ推理ヲ復シ且製作所及ヒ寺院  
 等ヲカシンカ地ニ建設スルヲ許サレタリ  
 此條約ノ魯西亞ノ為メニ緊要ナルハ實ニ言語  
 ノ能ク盡ス処ニ非ス海部ヲ領セシヨリ彼ノ近  
 時得タル炭田ヲ備ヘタルサガリン島ニ實地鴻大  
 ナル益ヲ為スノミニ非ラス彼ノ魯西亞ノ海軍  
 始テ大洋ニ門戸ヲ開キタルト云フヘシ之レ  
 曾テ余カ建言第四十二号ニ云々ノ如ク既ニ海  
 軍ノ門戸ヲ大洋中ニ開キタル上ハ仮令ハ英國

25

場合ニ於テ其利且便ヲ活用スルノ深  
 遠、獨リ魯西亞人ニ非サレバ之ヲ能ク測量シ  
 究ムルヲ得サルベキナリ  
 一、中央亞細亞ノ  
 魯西亞ハ已ニ亞細亞ノ北東ニ於テ宿意ヲ果シ  
 今又タ其ノ中央ニ眼目ヲ注射シテ怠タラサル  
 ナリ而シテ中央亞細亞中ニテ魯西亞カキリ及東  
 方トルキスタンノ兩國ニ眼カラ**頭**着スルモノ  
 ハ蓋シ一日ニ非サルナリ故ニキガト魯西亞ノ  
 間ノ交渉ハ兩國ノ和親條約以降未タ曾テ一日

モ多少不和ヲ含蓄セサルハ非サルナリ  
 一<sup>大帝</sup>ルハ或ル暴擧ノ問罪ノ為ニ彼國ニ出兵シ  
 タリコノ征伐ハ實ニ不幸ヲ表シテ既ニ征兵ハ  
 其意ヲ仕遂ケタルノ後ナ奸謀ニ陥リテ將校兵  
 士ニ至ルマテ盡ク國王ノ為ニ殘殺ニ逢フタ  
 リ次之再ヒ問罪ノ師ヲ送ル又タ同様ノ成果ヲ  
 リキ而シテ千八百七十二年 最後ノ争戦ニ於テ  
 始テ國王ト約束ヲ取結ヒ得ヘキノ点ニ至リテ  
 則翌年千八百七十三年八月二十三日ニ於テ和親  
 ヲ条約ニ其國權ヲ下シテ魯西亞ニ從屬ノ姿トナ

シタリ然リ而シテ魯西亞ニ系ヨリキワ國ヲ  
 シテ此際自國ノ藩圖ニ入レシテ豈何ノ難キ  
 アランヤサレトモ魯西亞カ之ヲ廢棄シテ合併  
 セサルハ抑モ深故アルナリ必ス英國ト葛藤ヲ  
 生スルヲ怖ルレハナリ若シ葛藤セハ魯西亞ノ  
 緊要ナル利益ヲ英國ノ為ニ防碍セラレル獨  
 リコ、ニ止マラス其關係スル處口廣大無量ニ  
 ノ且仮令合併スルモ外影ノミニ更ニ實益ト  
 ナラサルカ故ナリ千八百七十三年ノ條約ニ藉  
 テ魯西亞ノ漠原ヲ保護シ且貿易上ノ款條ヲ堅

固ニ実得<sup>ル</sup>シ<sup>ン</sup>カ<sup>ノ</sup>為<sup>メ</sup>ニ<sup>ニ</sup>デル<sup>タ</sup>地<sup>ノ</sup>全部<sup>ト</sup>  
 オキシエス河ノ左岸ハ則チ魯西亜ニ割<sup>ル</sup>共<sup>サ</sup>レ  
 タリ而<sup>シ</sup>オキシエス河ハ魯西亜及<sup>ヒ</sup>キワ國  
 船舶ノ外ハ出入スルヲ許<sup>サ</sup>サルナリカテテ  
 ニ於<sup>テ</sup>魯西亜ノ商客ハ商賣上ノ全キ自由及<sup>ヒ</sup>  
 不<sup>レ</sup>重<sup>ク</sup>産<sup>ヲ</sup>買<sup>ヒ</sup>且<sup>チ</sup>所<sup>有</sup>スル<sup>コト</sup>モ亦許<sup>認</sup>セラレタ  
 リ軍費償<sup>辦</sup>ノ為<sup>メ</sup>ニ二百二十萬ル<sup>ノ</sup>ブル<sup>ト</sup>  
ド乃<sup>至</sup>八十六  
センドニ當<sup>ル</sup>ノ巨額ヲ課<sup>セ</sup>ラレタリスチエラカマ  
メキシコ州  
ノ七十五セ  
 名<sup>ニ</sup>魯西亜ノ堡城ヲ築<sup>キ</sup>タリ銘<sup>ケ</sup>テペ<sup>ー</sup>ル  
 名<sup>ニ</sup>レキサンドロフスクト云<sup>ハ</sup>所<sup>メ</sup>オキシエス

河ノ右岸ノ一部ハ余カ前ニ述<sup>ヘ</sup>タ<sup>リ</sup>カ如<sup>ク</sup>  
 魯西亜ヨリボクハラ國ニ讓<sup>出</sup>シタリペ<sup>ー</sup>トル  
 フレキサンドロフスク城ノ守兵ハコロネル官  
 イ<sup>ノ</sup>ウノ<sup>ノ</sup>名<sup>人</sup>カ揮<sup>下</sup>ニ<sup>メ</sup>イ<sup>ノ</sup>ウノ<sup>ノ</sup>名<sup>人</sup>ハオ<sup>ー</sup>リ<sup>ー</sup>  
 タルヤカヨ<sup>ン</sup>地ノ主宰職<sup>ヲ</sup>リシナリ  
 魯西亜カボクハラ國ニ於<sup>ケ</sup>ル交際ハ常ニ中央  
 亞細亞中他ノ諸國トノ交際ニ比<sup>ス</sup>レハ甚<sup>タ</sup>和  
 平ナリシナリパ<sup>ー</sup>トル大帝在世ノ頃ヨリ以<sup>テ</sup>  
 兩國ノ間不断互ニ使節ノ往來<sup>アリ</sup>テ而<sup>シ</sup>結<sup>隊</sup>  
 旅行ノ貿易<sup>ヲ</sup>嘗<sup>テ</sup>阻<sup>得</sup>ヲ被<sup>ム</sup>リシ<sup>コト</sup>ナカリシ

ガタシケンシト地ヲ奪掠セラレテ以米ボクハラ  
 王小魯西亜ニ抵抗<sup>ハ</sup>始メテ兵ヲ擧ケタリ然  
 レヒイルヂヤレ地ノ合戦一敗地ニ塗リコジ  
 シト地ヲ奪ハレタルカ故ニ和ヲ乞ヘリ是レ千  
 八百六十六年ノ7ナリキ魯西亜ノ貿易ヲ此ニ  
 維持セント策ラハ則チボクハラ國ヲ占有セザ  
 ルハナラズバザールノ<sup>ボクハラ國ノ一部ナリ</sup>地ハ中央亜細亞  
 中樞軸ナル貿易輻輳ノ地ナルカ故ニ魯西亜  
 貿易上今日被ムル處ノ阻碍ヲ消滅セン1ヲ蓋力  
 忽チルハ國ノ為ニ至<sup>ハ</sup>ラ國ノ商利

本ハル、ニ至ルベシ

國ノ製造ノア

ニスタン地ヲ經テ茲ニ輸入セラル、  
 其數量巨大ナレハナリ若シボクハラ王ト魯西  
 亜ノ間ニ葛藤ヲ生セシナラハボクハラ王ハ素  
 ヨリ其國民ニ嫌忌セラレタルカ故ニ擧國忽チ  
 王ニ叛ヒテ魯西亜ニ應援スヘキナリ何トナレ  
 ハ間諜頻ニ行ハレテ絶ヘサハナリ矧ンヤ其  
 權官等即チシヤリザベス<sup>ボクハラ</sup>ノ領主等  
 ヒ王ノ親友等ノ如キ屢々書ヲ以テ私ニシ  
 ケント<sup>領</sup>通シテ魯西亜ノ救援ヲ促シ乞フニ

飛澤

於テヲヤ、予書ニ曰ク若シ魯西臣ノボクハラ國  
 ラ占有スルヲ欲セサレハ輒チ國王ヲ更ヘン若  
 シ國事ニ關係セシムラ欲セハ乃チ其策ヲ施シ  
 ンニハ彼等ノ黨内ニ於テ國中ニ甚タ人望ヲ得  
 タルシマリサブス地ノ領主ニ名アリ而メ現今  
 タシケン<sup>魯</sup>ト領ニ居住セル<sup>人</sup>セイトカン<sup>名</sup>ハ今王  
 ノ甥ニメ正當ノ嫡嗣ナリ其人タル天性愚鈍ニ  
 メ權ヲ有セサレ氏彼レヲシテ王位ヲ保有セ  
 ヲトハ魯西臣ノ為メニ大ニ益スル処アルハ

29

垂カ東方ニルキスタ  
 (但シチシヤール  
 七都ノ義)即チ東方トルキスタ<sup>名</sup>ニ國ハ前ニ  
 支那鞏<sup>ト</sup>号セルモノ、一部ナリシカ千  
 百六十二年四年ニ曰々教信者カ支那帝  
 ニ叛逆ノ亂ヲナシタリ支那ノ所轄トナリ  
 シ以前コノ國ハコシヤス人ニ因テ支配マ  
 セラレタリシカ支那兵ヲ為メニ追ハレ逃  
 カレテコリカンド國ニ匿ラレタリ然カレ  
 トモ屢々一揆ノ企謀ヲナシタリ<sup>キ</sup>偶々大  
 逆ヲ<sup>スル</sup>數發スルニ及ニテ彼等ノ一人ハカ

シカハ地ニ還ヘリ来タリテ揺動者ノ首領  
 トナリタリヤクフベク<sup>名</sup>ハタシタ<sup>名</sup>ト地  
 ノ人ナリ前ニコ<sup>名</sup>カント國王ノ一官吏  
 シテ魯西亜ガ千八百五十三年ニア<sup>名</sup>メケ  
 ヲト城(今時ペロフスキ<sup>名</sup>一城ト云)ヲ掠奪ヤ  
 ル時ニ同城ノ指令官タリシナリ是ノトキ  
 ニ方ツテヤクフベク<sup>名</sup>ハコヂマ<sup>名</sup>一人ト和  
 ス結<sup>名</sup>彼レノ熟練ト勇敢トニヨツテ激烈  
 ナル一血戦ノ下ニ全ク支那ニ勝タリ而  
 漸クニ袁ヲ回ラシ  
 ヤ<sup>名</sup>一ヲ退ク獨リ已

ロカ権ヲ國內ニ專ラ 千八百六十五年  
 アタリツクカシ<sup>王ノ尊号</sup>ノ称号ヲ犯シタリ而  
 自來逐次ニ支那及ヒドンカン<sup>國名</sup>所領ノ  
 諸都邑(最後ニ取りタル地ハウルムツ及ヒ  
 マナスナリ)ヲ掠奪蚕食メ今ハ殆トクル千  
 ヤ州全部ヲ所領スルニ及ヘリ但シ<sup>名</sup>スキ  
 ーレルス<sup>氏</sup>ノ千八百七十四年三月七日付  
 千八百七十四年間合衆國交際報告書八百  
 二十九葉ヲ照會スヘシ

魯國<sup>名</sup>キ<sup>名</sup>ケントスルニハ必ク先ツ<sup>名</sup>ス  
 飛澤武

カリヤ國（支那）ハテイマシヤンベル  
 ト号セリ（トイリート号セル豊饒ノ國  
 ラ占得スルヲ必要ナリシナリ該國ノ住民  
 ハ一種屬ニアラスカルムクス種アリタシガ  
 一ス種アリ蓋シタシカンス種ハ素ト  
 支那種ナリ故ニ支那語ヲ言ヒ支那服  
 ヲ著ク然レトモ宗門ニ至ツテハ回々故ヲ  
 信スルナリ國內ハ古來諸ノ産物ニ富ミ人  
 亦隨ツラ多カリキ而シテ差ン國內異  
 種ノ争鬪破裂セサ  
 ナラ今日ニ至ルマ

31

一定昔日ノ富饒ニ保テ  
 一タリシ一亦疑

ル處ナリシカレト支那政府ハコノ内乱ヲ  
 鎮壓ニ得カシカ故ニ魯西亞ハ其際ニ乘シ處  
 許シテ内乱ノ自國ノ所領ニ波及シ將ニ騷擾  
 ヲ讓サントスルノ景状アルカ故ニ之ヲ未萌ニ  
 防禦セサル可カラスト唱ヘテ則チ彼ノ國事ニ  
 関涉セント決意シ千八百七十一年之ト戦フ  
 纔カニ二週間ニノ國內全部ヲ鎮定スルヲ得  
 リ而シテ支那ヨリ其暴奪ヲ責問スレハ魯西亞ハ  
 乃チ断然之ニ答テ云ヘリ魯西亞ハ決テ支那ヨ

飛騨

リ一地方ヲモト奪ハタルナシト且魯西亞ハ攻  
 襲セシ地ハ支那ノ鎮撫行届カスノ既獨立ヲ  
 遂ケタル逆徒ノ所轄中ニ在リシト且素ヨリ  
 西亞ハ其方角ニ於テ所領ヲ廣メント欲スルノ  
 念更ニ無シト雖其然レ其境隣ニ斯ル擾乱  
 ルヲ忽ニシ置クヲ得サルナリ之ヲ忽ニシ置カ  
 ハ果シテ亂勢自國ノ境内ニ延蔓シ竟ニ國難ヲ  
 来ラコ免カレヲ得サルニ至レハナリ加之原  
 ハ之那政府カ該國ノ所轄ヲ維持セシト欲セシナ  
 則内亂癸萌セル際凶  
 鎮制シ法例ヲ布キ

ニ適宜十分ナル軍兵ヲハシテ治國ノ策  
 成スヘキハ必然ナリ然ルモ其ノ軍兵スラ  
 ラレス故ニ魯西亞ノ占有スル処トナレリ是  
 レ千八百七十二年ノ一ナキ明年日本使節ハ  
 北京ニ在リテ謁見ノ許可アラン一并ニ台湾島  
 ニ関スルミヤコシマ及ヒカシワシマ事件裁斷  
 ノ一ニ付議論教日ニ涉リ支那ハ日本ト兵端ノ  
 將ニ関クヘキ勢ヲ怖レタリ且外國ハ支那  
 ニ迫テ東方トルキスタン國ハ公然ト議議セラ  
 ル乎或ハ支那ノ所轄トセラル、乎判然決定



セラレントア促カシ且説テ曰ク若シ支那カ之  
 ラ所轄シテ其地ニ属セル大小ノ争務盡ク擔任  
 スルヲサハハ之ヨリ生スル百ノ利益ハ盡ク  
 支那ノ所得トナルヘシ然レ氏支那カ之ヲ確乎  
 シル所有トナスニ非サレハコレヲ将来ニ保有  
 セシコラ放念セシモノナルヘシト然リ而シテ支  
 那ハ當時其ノ所領トスル処甚ク廣闊ナル故  
 ニ敢テ該國ニ統轄ノ權ヲ保持セシコラ顧ミテ  
 一ツリ然レ氏支那カ之ヲ讓與セシヤ否ヤハ  
 公告セシレサリシナリハ又支那カ讓與セサ

ニモヤヨ魚西亜ノ千八百ノ年ニ於テ依頼シ

タニ意旨ニ支那カ慮マサリシ忽慢ハ刻チ讓與スヘシノ  
 作動ヲ見認ルニ十分ナランコラ責ムヘキナリ而シテ支  
 那之ニ服マシムルハ魯西亜ハ必ラス該地ノ事務ヲ久シク管  
 轄レタルコトニ就テ巨額ノ償金ヲ需求スヘシ而シテ其金  
 額タルヤ之ヲ償フヨリモ寧ロ支那カ讓與ノ乞フ許認  
 スルニ如カナルヘシ  
 斯クテ魚西亜ノ陰謀ヲ逞フレテハリストルキス  
 一國ノ北方ヲ併呑シトシ英國ハ又貿易ノ途ヲ閉  
 ラ該國ヲ占押ヘシコラ企望シタリ故ニマクブベク

該國ノ領主カ政權ヲ掌握スルノ日ニ於テ英國ハシヤ  
 ウ氏ハイワルト氏兩者ヲ送リテ先國內ノ事情ヲ  
 探索セシメタリ后千八百七十年「アールシーフ」氏  
 ヲ以テ使節ニ任シ同國ニ送遣セリ「シヤウ」氏此ノ  
 行ニ隨後ス然レ氏「ヤクローブ」名人ハ當時不在殊  
 實候切迫シ来ルニ逢フテ使節ハ空シク引歸シ  
 シタリ千八百七十三年「ヤクローブ」名人  
 度ニ使節ヲ余遣セリ其後千八百七十三年「シヤウ」氏ハ再々使  
 節ヲ奉シ該地ニ赴ケリ其趣意タルヤイノ  
 ルキスター國印度ノ貿易交通ヲ開

34

ンカ為メ第一「ア」  
 ニ「漠原」ニ第二道ヲ「ブル」ト「ギライ」  
 ニ第二道ヲ「タク」ト「カラ」コリユニ取極メ  
 トハ目的ナリシカレコノ使節ハ条約取極メ  
 付キ失望セシノミニ非ス往來道路ノ便利ニ付  
 テモ甚制限セラレテ判然タル成果ヲ奏セザリ  
 シナリ  
 尤ニ於テ魯西亞ハ尚幸ヲ得タリ而メ「ヤクローブ」  
 「名」人ハ襄ニ彼レカ印度ニ發遣セシ使節ヲ歸  
 國シテ后千思ヘラク魯西亞國ハ自國ト境ヲ接

飛

スル最モ近之故ニ最モ畏レサル可カラスト是  
 ヨリシテ魯西亜ニ懇親ヲ結ブ<sup>ト</sup>甚<sup>ク</sup>其<sup>レ</sup>功<sup>ト</sup>タ  
 而<sup>シテ</sup>兩國ノ間交際常ニ穩平ナラン<sup>ト</sup>ヲ冀ヒ  
 彼<sup>レ</sup>則使節ヲシテタシケン<sup>ト</sup>魯西亜領ニ往カ  
 シ<sup>テ</sup>其談判ノ結局ハ竟ニ魯西亜ノ公使及ヒ領  
 事カカレガ<sup>ル</sup>地ニ在<sup>ル</sup>苗スル<sup>ト</sup>ヲ許認セリ然ト  
 雖<sup>モ</sup>魯西亜人民ハ當時兩國間ニ生シタ<sup>ル</sup>外ノ  
 葛藤<sup>ハ</sup>其今後ニ生スヘキ患害ヲ裁制セ<sup>ン</sup>ニ  
 大際ノ方畧ニ因ランヨリ寧<sup>ク</sup>口<sup>ヲ</sup>断然征服<sup>ト</sup>可  
 ハ<sup>ル</sup>良策<sup>ハ</sup>如カスト領認セ<sup>ル</sup>

55

トストルントル<sup>ル</sup>スタ<sup>ン</sup>國ノ赤<sup>ク</sup>支那ノ從  
 屬中ニ在<sup>テ</sup>ヤク<sup>ク</sup>ブ<sup>ク</sup>名<sup>カ</sup>反逆企謀中ハ魯  
 西<sup>亜</sup>カ之ヲ合併セント冀フモ支那ト異議ヲ醸  
 スノ危險ヲ犯カスニ非サレハ企望ヲ遂クル<sup>ト</sup>  
 能ハサリシナリ然レ<sup>モ</sup>今ヤ既ニ英國ヨリ「<sup>フ</sup>オ<sup>ル</sup>  
 シーツ」氏ヲ使節トシテ發遣セシ先轍アレハ魯  
 西<sup>亜</sup>ニ於テハ「ヤク<sup>ク</sup>ブ<sup>ク</sup>」名<sup>カ</sup>ヲ以テ正シク獨  
 立ノ國土ト見做シテ事ヲ策ルノ条理ヲ占メ得  
 タリ是ニ因テ<sup>モ</sup>觀レハ支那カ該國ヲ以テ再  
 ヒ自國<sup>ノ</sup>版圖タラシメント欲スルモ前日ニ比

スレハ其冷難界シテ多カラニ何トナレハ支那  
 不特リ其國民ノ戦フテ之ヲ回復シヨレニ法制  
 ヲ布キ得ルノ好機ヲ失シタルト言ニ一由ノ  
 ニ非サレハナリ況ヤ己ニ魯西亜ノ保護ヲ被ム  
 リ其藩圖中ニ加ハリタルノ後千コレカ回復ノ  
 謀ラント欲スルモ其危険前日ニ十倍シテ支那  
 ノカラオヤ故ニ談國ノ回復ヲ謀ランカ為メニ  
 支那ハ軍兵ヲ進メタリト雖厄コノ役ヤ倒底無  
 益ニ爲スヘシ去ル八月十三日癸兌ノ北京ガ  
 新聞ニ記載セシカ如ク其軍將ナルカミ

96

ル地ノ「<sup>リ</sup>」リメリー「<sup>ウ</sup>」ウル「<sup>ウ</sup>」軍都道「<sup>ウ</sup>」エン  
 「<sup>リ</sup>」人、軍資ノ不足ニ因テ進軍ヲ途ニ止メ  
 而メ彼レカ乞フ處ノ軍資貳拾萬テ「<sup>カ</sup>」カ  
 未タ送還セラレサル前キ已ニ該國ハ魯西亜ノ  
 掌裏ニ入ルナラント前文ヲ稿スル「<sup>リ</sup>」終リテ八  
 月二十七日付ノ電報到着セリ其文ニ曰ク「<sup>ウ</sup>」  
 「<sup>リ</sup>」人ノ卒ユル兵ハ止ヲ得ス營ヲ築キ穀  
 ヲ種エ兵収護ヲ待ツテ「<sup>カ</sup>」カ右チ進軍セシ  
 トスト且「<sup>カ</sup>」カ「<sup>カ</sup>」カ「<sup>カ</sup>」カ「<sup>カ</sup>」カ  
 テ漸「<sup>カ</sup>」カ支那領ノ都邑ヲ奪掠スト雄氏敢テ

飛

大

之レニ抗フルモノナシトゾ魯西亜ノ意測  
 ハ蓋シ「ヤクブベク」カ掠奪セシ地ヲ云ニ立  
 スラスシテ又彼レヨリ取ラント欲スルノ  
 ミ〇「スキール」氏ノ著述セル中央亜細亞  
 報告書中ニ曰ク「ヤクブベク」名ノ魯西亜ニ  
 宿怨ヲ挾サムヤ日已ニ久シ而メ魯西亜商  
 客ノ彼レカ輕慢ト防得トヲ凌ヒテコカ  
 レト國ニ入ラントセシモノハ槩子彼レカ  
 為メニ嚴酷ナル待遇ヲ被ムリタリキ始メ  
 魯西亜ノ該國ノステ支那ノ所領中一ノ反

37

逆黨ノ割居セシモノト見做スルヤ獨立國  
 ト公認スルヲ欲セサレハナリ故ニ  
 或ハ兩國ノ間々事ヲ商議スヘキアリ官  
 吏ヲ該國ニ發遣セシテ数次ニ及ヘシト雖  
 凡「ヤクブベク」ヲ以テ真正ナル王者ト公  
 認セサルコトニ注意セリ千八百七十二年  
 於テ「ヤクブベク」名ハ大ニ魯西亜ニ抗敵ノ状  
 態ヲ顯ハシ魯西亜ハ竟ニ征討ノ師ヲ送ラ  
 ガルヲ得ザルニ至レリ是ニ於  
 路ヲ「ヤンシヤ」山及ヒナリ

キ兵器兵糧ヲナリン城ニ積藏  
 用意ヲ為セリ然レバ「ヤクローブ」  
 千方向ヲ變ヒテバロニ爵「コトルバルス」  
 ト和親ノ約ヲ結ヘリ而メ大将「カンフラウ」  
 ン」及ヒ「ペートルスボルク」政府ニ於テ  
 ヲ准許セリ其條約ノ趣旨ハ曩ニ「コーカン」  
 ト「ボクハラ」國等ト取結ヒタル貿易條約  
 ト一モ異ナル處ナシ昨夏中「カール」王  
 ハ使節ヲ「ペートルスボルク」府ニ遣ハシテ  
 魯帝ニ見ヘシタリ是レ「西距カカシカ」

38

國王ノ使節ヲ言ケタル  
 故ニ「ヤク」  
 ブ「ベク」名ヲ以テ將來  
 「正」クカシガル王  
 ト認識セラル、ニ至レリ然レバ當時  
 「カール」國ニ於テ國王「ヤクフヘク」ノ命  
 英人「プエビス」氏等ノ結隊旅客ハ粗暴  
 ノ挙動ヲ被ヒリシガ為メ該國ト英國ト  
 ノ談判數日ニ涉リテ解ケサリシナリ故ニ魯  
 西垂ハ之ヲ或ハ怖レサルヲ得サリシナク  
 何トナレバ「カール」國ノ魯西垂所領ト境  
 界ニ接スルヤ印度ヨリモ尚近シク其地

勢々ル到底道路険隘ナラサルヲ以テ魯西  
 亞領内ニ侵入レ得ルモ亦甚容易ナレハナ  
 リ故ニ魯西亜ハコノ怖ルヘキ難言ニ漸ホ  
 ランカ為メ明春ヲ期シカシカル國ニ兵ヲ  
 用イント決定セリ則チ名義ヲ假ルニ魯西  
 亞商人ヲ待遇スルノ奇虐ナルヲ以テシ償  
 金壹万五千「ル」ブルト罰金壹万弗ヲ得  
 ト欲スルナリ素ヨリヤククヤベク「カ」カ  
 コ 需求ヲ嫌拒セハ直ニ兵ニ及フナラ  
 ント推量セラレタナリ但 八百七十四年

著述ノ合衆國ノ外交際記

凡今ハスヘシ

39

英國ノ魯西亜ノ為メニ先年ナリタル一ニ付テ  
 ハ前々前章ニ述ハタルカ如シ故ニ大ニ望ヲ  
 失セシヲ以テ忽チ策ヲ換テ印度ト東方ニ  
 スタン國ノ南ニ在ル一國ト交通ノ道ヲ開カン  
 ト欲シ輒チカルキユツタ 印度都商人會館チ  
 上ルオフコムメルスノ保護ニ因テ經驗アル  
 「チ、チ、ク、」氏ヲシテチベツト國ニ使セシメ  
 シ「ヲ」企テクナリ而シテ「ア」コノ使者ハ  
 意スベキト思ヒシモ突然チベツト土、支那

後備アヤヲ頼ンテ「グーブル」氏カア  
 リ支那ニ至ル道路ノ妨ケタリ川チ同氏カ  
 テハツアレ国ヨリシユシヤ国ニ至ラントスル  
 時ニ於テ同国王(王ヲハツト)ノ為メニ妨ケラレタ  
 ルカ如クナリキ「グーブル」氏ノ此ノ行ヤ既  
 望セリ故ニ英國ハ又夕眼ヲ轉シテ印度所領  
 南ニアルビルマ國ニ向テ策ヲ設ケント企テ夕  
 リ蓋レヒルマ國ハ印度ヨリ直路達シ得ルハ  
 ニメ或ハ支那ノ防碍ヲ波ルルニ非サルヨリハ  
 他ニ妨ケヘキモノ無ク知レタリ而シテ議此

40

ニ決シ英國ハコノ案ヲ冒シ  
 予意見ヲ遂ケシメンカ為  
 マノガリトシテ出發セシメタリ然カ  
 ニ同氏等モ亦曾テ「グーブル」氏カチベツト  
 ニ於テ進路ヲ妨ケラレシカ如ク若シ敢テ前  
 路ニ進入セント主張セハ兵ヲ以テ制止セラ  
 ハ昔ノ豫報ヲ受ケタリト云フ然レトモ兩使  
 者ハ「グーブル」氏ノ舉動ニ及シテ支那人ヲ侮  
 慢シ彼等ノ威嚇ヲ顧ミ忌セサリシカ  
 「グーブル」氏ハ無難ニ遁逃スルヲ得

飛翠哉

大書省



一ニセル 伯蘭西領サゴン 名国 近隣ニ於テモ  
 年以降 東方所企ノ目的 於テ一ト 企望ヲ同  
 コノ故ヲ發スルニ 於テヤ 英國ハ 千八百五十八  
 ノ地ナリ  
 大那トノ 間宏大ナル 貿易ノ 輻輳セル 最モ 緊要  
 通スル 大道咽喉ノ 地ナリ 故ニヒルマ 国ト南  
 殺害ニ 逢フタリ 但マンウ<sup>#</sup>ニ 邑都ハモメ<sup>#</sup>ニ 国ニ  
 キー<sup>#</sup>ニ 丘ノ山脚ニアルマンウ<sup>#</sup>ニ 邑都近傍ニ 於テ  
 シテ「マルカ<sup>#</sup>」シ 支那領<sup>#</sup>南州ノ 外カ  
 モ 兩使<sup>#</sup>ハ 竟ニ 支那人ノ 為メニ 襲撃<sup>#</sup>ラレ而

41

欺誦ヲ 逞フスル<sup>#</sup> 其際 策<sup>#</sup>テ 印度ノ  
 北東ニ 向テ 国土ヲ 開墾<sup>#</sup> 仕遂ケ得ルノ  
 僥倖<sup>#</sup>ヲ ラン<sup>#</sup> 一ヲ 英カヘリ 若シ 則<sup>#</sup>佛英兩國 心  
 ヲ一ニ メ事ヲ 策ラハ 英ヒ 進ンテ 雲南州 全地方  
 ニ 所領ヲ 廣張セシ<sup>#</sup> 甚タ 容易ナルヘシ 則<sup>#</sup>甲<sup>#</sup>  
西ラハ コー<sup>#</sup>チン<sup>#</sup>チ<sup>#</sup>マイ<sup>#</sup>ナ<sup>#</sup>ヲ 合併シ<sup>#</sup>乙<sup>#</sup> (英國)  
 ルマ 國ヲ 合併シ 得ヘキナリ 果シテ 然ラハ 北京  
 政府ハ 忽チ 不快ナル 隣國ヲ 得ルニ 至ルバシ 依  
 テ 支那 政府ハ 深ク<sup>#</sup>ニ 厭忌<sup>#</sup>ル 處<sup>#</sup>ア<sup>#</sup>テ 英  
 國ノ 絶<sup>#</sup>ニ 至ラハ 難害 究<sup>#</sup>メテ 大ナル<sup>#</sup>ハ キヲ 察

飛

大

スルカ故ニマルカリ一人名暴殺ノ事件、付テ英  
 国ヨリ償辨ヲ要求ス。氏兵ヲ、之ヲハマ  
 サレヘシ是レ啻一ノ詭計ナル、ミ而シテ支那政  
 府ハ雲南ト印度トヲ接續セシムルノ街道ヲ開  
 カニトヲ准許スベシト雖トモ漸次ニ進歩セシ  
 メント欲セル貿易上ノトニ於テハ必ラス種々  
 ノ故障ヲ設ケテ實地ニ實益アラシメサルコトヲ  
 謀ルニキナリ(適々千八百五十八年ニ取結ハレ  
 タル支那ト豹和典ノ条約)第ニ條ハ實ニ無益  
 ノ文字ニ属セリ抑々子ノ條款ノ故テ爾テ以テ

42

豹和典人民ハ游獵、商賣、タメニ路宗ヲ提  
 携シテ内地ヲ通行シ得ルヲ梅和ヲ與ヘラレ而  
 シテ、准許ハ霧カニ條約中ニ載セラレタレ氏  
 貿易上ニ関シテ之レヲ実行セントスルニ方、  
 テハ則チ支那人ノ為メニ妨ケラレタリ故ニ又  
 シ今年ウエート氏ノ取結ベル條約ニ於テ雲南  
 ラ起ヘテボルマ國ニ向ハントスル貿易ニ関セ  
 ル條款ニ付テモ同様タルヘキナリ  
 英國カ志ヲ遂ニハヒ、  
 スルト印度ノ北亞地方ニ於テスルト何レカ難

キ何レカ易キカト問フニ當リ余ハ断レテ到底  
 志ヲ遂ケ能ハサルハト思フ何トモレハ  
 仮令ハ一個ノ人アリ酷吏ノ為ニ拷打セラレ  
 テ一端其苦楚ニ堪ヘカネ枉ケテ冤罪ニ服スト  
 臣モ鞭打ラ歇ムレハ変シテ不知ト云フカ如ク  
 アフカニスタン、キワ、ホクハラ、クドヅ等ノ諸國  
 モ之レト等シ則チ一端ハ英ノ暴威ニ迫懼セラ  
 レ其官吏ト各事其意ニ從フヘキ約ヲ結フヘ  
 キト虽モ直ニ懸テ約ニ背キ機會ノ至ルヲ俟テ  
 及逆抗敵ナスヘケルハナリ且ク又タ英國力是

43

等 諸國ニ侵入セシムラ違シ得サレモアハ二  
 以テ理ニ基クナリ一ハ英ノ在手中ノ遲延ナリ  
 二ニヘートル大帝ノ在世中ヨリ維ニ交誼相通  
 シタル魯西亞ノ為メニ先報ヲ着ケラレタリ  
 因リ又一ハ英國カ印度ニ於テ其權勢ヲ振ント  
 欲シ行為セル処ノ虐政ノ為メニ其名ヲシテ  
 ニ印度接近ノ諸國ニ尽ク恐怖且嫌忌ノ心ヲ懷  
 カシメタルニ因ルナリ○魯西亞ニ於テ米國公  
 使館ノ厝記宮ニシテ一レル氏ノ習ヲ  
 テ大ニ民事探訪ノ便益ヲ得タリ千八百七十四

飛翠抄

六

百

年三月七日付ヲ以テ同氏ヨリシントペイトル  
 スポルクノ派出ノ台衆國公使ニル書曰ク  
 余カラマルカンド地名ニ在リシ片前ニアカ  
 候ナリシアフジユルラーマンガン人名ト會シ長  
 許ノ未談論終ニアフガニスタン國ノ印度ニ於  
 ケル關係上ニ押移リ彼レ曰ク若シアフガニス  
 タン人民ニ一言ヲ贈ルニ將ニ印度ニ於テ英人  
 民ヲ襲撃セント欲スト去フイヲ以テシ且其戰  
 争ノ主意ハ英ノ所領ニ向クシテ印度ニ向  
 フニムフニ非ラサニアラ証明クシナラハア  
 フ

ガニスタン人民ハ誓ヒ緩金ヲ給セナルモ甚ク  
 催促ナカ、ルモ甘心以テ  
 ナリト

現狀斯ノ如シ而シテアフガニスタン國ハ地理  
 ニヨリテヒンドスタン國ノ外城ノ一部タル緊  
 要ノ國ナリヒンドスタン國ニ藉テ魯西亞ハ其  
 北方ヨリ印度ニ攻入スルヲ得ベケレハナリ故  
 ニ英國ニ於テモ亦克クコノ事情ヲ熟知スルヲ  
 以テ千八百零二年若シ魯西亞英領印度ヲ襲  
 フトアラハ佛ハ必スコレヲ補翼センコトヲ察セ

ルヤ英國ハ頗リ二百方尽カシテ其国王ヲシテ  
己レノ情由ニ從カハシメントシテタリ因テコ  
ノ目的ニ於テ英國ハエルブリハトソン氏ヲ首ト  
シ數者ヲシテ同國王ニ使節タラシメタレ其  
結局ハ地理及ヒ國產ノ實況ヲ編集スルニ過キ  
サリシナリ

既ニ魯西亞ノ藩國中ニ在ルホクハラ國及ヒ東  
方トルキスタン國トアフガニスタン國トノ交  
際甚タ和親ヲ結ヘリ故ニ魯西亞カクントツ國  
吞<sup>ゴ</sup>セン<sup>ト</sup>ヲ須要テリト決定セハ之レヲ占有

45

セ<sup>ト</sup>乃チ魯西亞ノ掌中ニ在ルモノ、如キ而  
巴  
史上未タ曾テ魯西亞カアフカニスタン國ノ南  
ニ存在セルベル<sup>ト</sup>チニスタン國ト交誼ノ好<sup>シ</sup>ラ  
通セン<sup>ト</sup>ニ付テ尽カセシ<sup>ト</sup>ヲ見聞セサルナリ  
蓋シ該國タルヤ地質礫确ニメ物産豊饒ナラズ  
而シテ地勢ハ天然ニ峻阻ヲ帶ヒテ其土俗ハ著非  
ナル暴虐ヲ以テ務トセルナリ因テ新國ヲ探訪  
スルヲ以テ樂<sup>シ</sup>トスルノ遊客ナルモ亦征軍ヲ  
帥ヒテ攻撃セン<sup>ト</sup>スルモ到底益スル処ナケレ

ハ該國 足ヲ容ル、ヲ欲セサルナリ故ニ魯西  
 亞ハ該國ヲ以テアフガニスタン國ノ南方ヨリ  
 襲來セントスル敵ヲ未だニ防禦スルノ堡城ト  
 見做シ該國ヲシテ滅却ニ至ラシムルヨリハ之  
 レヲ存シテ他國人ノ交際ヲ攘ハシメ漸ク當今  
 ノ開化ニ趣クヲ以テ自國ノ為メニ酬フ処ノ利  
 益多カラントナセリ○國語ハ当今ノペルシヤ  
 國語ト畧相似タリ○ベルーケスタン人種ハ容  
 貌美麗ニシテ天賦體格ニ骨カラ備ヘタルニ非  
 サ 凡風土及ビ氣候ノ變換ニ馴染セルカ故ニ

46

克ク萬種ノ辛苦ニ堪ヘ得ルナリ土俗牧業ヲ事  
 トシテ而シテ平常掠奪ノ為ニ兵ヲ交ユルコト多  
 際ニ臨ミテヤ兇暴百端敵テ彼等ノ辭セサ  
 ヘナリ因テ彼レ等ノ已ニ得タル惡名ハコレ  
 ヨリ來リシモノナルコト疑ヒナシ土人中或ハタ  
 ルタル人種ヲ見ル事アリ


[Faded handwritten text on the left page, illegible due to fading and bleed-through.]

